

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成30年 11月 30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 こころの未来研究センター

職 名・学 年 研究員

氏 名 大塚 結喜

助成の種類	平成 30年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研究集会名	心理学協会第59回大会 59th Annual Meeting of the Psychonomic Society	
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発表題目	Executive Functions Involved in Affective Theory-of-Mind in the Elderly	
開催場所	USA・Louisiana ・New Orleans	
渡航期間	平成 30年 11月 14日 ～ 平成 30年 11月 20日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円
	使用した助成金額	250,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空運賃: 144,710円
		滞在費: 98,190円
		自宅・空港間交通費: 2,100円
空港・ホテル間交通費: 5,000円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回申請時期が4月になったことにより、初めて貴財団の助成を利用することができました。おかげで久しぶりに国際学会で発表することができ、ありがたかったです。必要な手続きも最小限に抑えられており、とても有益な助成だと感じました。このたびは貴重な機会を与えて頂き、ありがとうございました。	

成果の概要

こころの未来研究センター・研究員
大塚結喜

1. 学会の概要

学会名：59th Annual Meeting of the Psychonomic Society

開催地：アメリカ、ニューオーリンズ

開催期間：2018年11月15日～18日

2. 学会内容

Psychonomic Society は 1960 年に認知心理学者の国際団体としてアメリカで設立され、現在では 40 ヶ国以上から 4,100 人もの科学者が参加し、Psychonomic Bulletin & Review や Memory & Cognition など 7 つもの国際科学誌を刊行しています。59th Annual Meeting of the Psychonomic Society はその年次集会であり、例年国際的な第一線で活躍する著名な認知心理学者の講演やシンポジウムが行なわれるほか、各国の若手・中堅の認知心理学者が最新の研究についてポスター発表を行ないます。各国から集まった認知心理学者が一堂に会し、今後の認知心理学の方向性について議論し、最新の研究動向について知ることが出来る貴重な機会です。

3. 発表内容

11月17日に「Executive Functions Involved in Affective Theory-of-Mind in the Elderly」というタイトルでポスター発表を行ないました。先行研究では、若年者では3つの実行系機能（抑制・更新・切替）のうち抑制能力が重回帰分析で感情的心の理論課題の成績を最もよく説明することから、実行系機能の中でも特に抑制能力が感情的心の理論を支えている可能性で指摘されてきました。しかしながら、実行系機能が加齢とともに低下する高齢者でも若年者と同様の傾向が見られるかどうかはこれまで検討されていません。そこで本研究では、高齢者を対象に重回帰分析で感情的心の理論と3つの実行系機能の関連性を検討しました。その結果、感情的心の理論の指標を従属変数とし、抑制・更新・切替の3つの実行系機能の指標を独立変数として前進ステップワイズ法で重回帰分析を実施したところ、抑制だけが感情的心の理論の成績を有意に説明しました ($\beta = .31$, $t = 2.40$, $p < .05$; $R^2 = .10$, $F(1,55) = 5.78$, $p < .05$)。この結果から、加齢の影響で実行系機能が衰えても、感情的心の理論にとって重要なのは3つの実行系機能のうち抑制能力である可能性が示されました。

4. 成果

発表では、これから論文として刊行するうえで参考となる貴重な意見を頂きました。また講

演やシンポジウムでは最新の研究手法や今後の研究動向について情報収集を行なうことができたほか、以前の共同研究者ともディスカッションを行なう機会が持てました。さらに大会終了後には **Psychonomic Society** の特集記事で紹介するポスター発表者として選んで頂き、ブリストル大学の **Lewandowsky** 教授からメールでインタビューを受ける機会を頂きました。

最後となりましたが、この度は本国際学会参加に際して助成を賜りました京都大学教育研究振興財団に心より御礼を申し上げます。